

映画探索

『夜と霧』 ナチス絶滅収容所の実態を暴く

安井廣之 クリニック院長

一九五六年 仏

監督 アラン・レネ

脚本 ジャン・ケロール

この映画を観て、この映画のことを忘れてしまう人はまずいないだろう。

ナチスの絶滅収容所がどのような目的で造られ、そこで何がおこなわれたか。身の毛のよだつ実態が、赤裸々な映像と冷徹な語りで暴かれる。

カラーと白黒の映像が交互に現れ、フランス語のナレーションが流れる。無声映画なので。登場人物が声を発することはない。死体の腐臭、入浴していない人体の発する垢と汗のにおい、排泄物のおい、それらが画面から溢れ出て来ないので、何とか終わりまで観ることができる。だが、途中で気分が悪くなり、席を立つ人がいても不思議ではない。撮られた無残な死体の数は数百を超える。

ナレーションを書くよう依頼された詩人ジャン・ケロー
ルは、映像を觀せられて吐き気を催し、編集室で一行も書けな
かったという。

そのケロールの手になるテキストを音読しているのは、ミ
ツシエル・ブーケ。非情ともいえる突き放した語りで、その
昔ニュース映画の名ナレーターとして鳴らした竹脇昌作（四
九歳で自殺、竹脇無我の父）のしゃべりから情を抜き去った
感じだ。

音楽はハンス・アイスラー。冷戦下東ドイツの音楽家であ
る。

監督はアラン・レネ。難解な『二十四時間の情事、ヒロシ
マ・モナムール』（一九五九）や『去年マリエンバード』（
一九六一）を手がける数年前にこれを撮っている。

一九四五年にドイツは降伏し、連合軍が強制収容所を開放
する。そのときに撮影された映像とドイツの残した記録をも
とに、アラン・レネは、一九五五年に自らが撮影した強制収
容所のカラー映像を織り交ぜて、このドキュメンタリーを創
った。

制作を依頼したのはフランスの第二次世界大戦歴史委員
会という公的機関。ホロコースト（特定のイデオロギーによ

る大量虐殺）に関する教育的見地から、この映画はフランス
全国の学校や大学で積極的に上映され、多くの児童、生徒、
学生がこれを觀た。

ドイツでは、ナレーションがドイツ語に翻訳され、学校も
含めて全国で上映された。

日本では、一九五六年に、「あまりに残酷で風俗公安を害
す」と判断されて輸入が認められず、ようやく六一年に、残
酷と判断された複数個所をカットしたバージョンの上映が
許可された。ノーカット版の上映は七二年まで待たねばなら
なかった。何という頑迷固陋さであろうか。

映画の概略

不協和音を交えたアイスラーの音楽とともに、カラーで、
穏やかな田園風景と幾重にも張り巡らされた鉄条網が映る。
アウシュヴィッツ絶滅収容所だ。映像を背景に、シュトルト
ホフ、オラニエンブルク、アウシュヴィッツ、ノイエンガメ、
ベルゼン、ラヴェンスブリュック、ダツハウ、マウトハウゼ
ン等に強制収容所が造られた、との声が流れる。

次は白黒で、ナチスの政権掌握とそれを熱狂的に歓迎する
ドイツ国民。やがて、強制収容所の建設が始まる。まるで競

技場か巨大リゾートホテルのようだ。大手が参入し、利権が絡む。続いて、ユダヤ人や政治犯たちの強制移送。ヨーロッパ各地のドイツ占領国で狩り集め、貨車に詰め込む。一輛に百人が立ったままだ。便器用の樽が一個放り込まれる。

画面はカラーにかわり、アウシュヴィッツの引き込み線が貫通する収容所正門。次いで、白黒で当時の建物が映る。鉄門には「ARBET MACHT FREI、働けば自由になれる」とある。運ばれた人たちは衣服を奪われ、素裸にされ、青い縦じまの囚人服を着せられる。さらに、丸坊主にされ、番号を入れ墨され、服には標識が縫い付けられる。政治犯は普通犯より下の格付けだ。

囚人を監督するのはカポーと呼ばれる普通犯の顔役。その上が特権階級の親衛隊員。口を利くには、三メートル下がらねばならない。頂点に所長がいるが、管理は部下に任せている。

ベッドは板敷きの三段で、一つに三人が寝る。寒いので体を寄せ合う。朝はこん棒で叩き起こされ、ひしめき合い、盗まれた衣類を捜す。五時に点呼場に集合、夜間の死者のために数が合わない。

石切り場に向かう囚人に、仲間が行進曲を演奏する。雪は

凍った泥と化し、寒さは傷を悪化させる。夏は渴きと赤痢に苦しむ。マウトハウゼンの石切り場では、三千人のスペイン人が死んだ。

体重が三〇キロしかない囚人たち。食べ物は夢にまで出てくる。スプーン一匙の価値は計り知れない。一匙少なければ、寿命が一日縮む。だが、弱者は強者の強奪を防げない。

便所棟。便器は長い便槽の上に渡した細長い板に、互い違いに丸い穴を開けただけのもの。板の両側に背を向けて腰をかけ、用を足す。三列あるので、一度に二百人くらいは受け入れ可能だ。もちろん、仕切りもなければ、トイレットペーパーもない。

孤児院も不具者用の建物もある。ガス室行きの近道だ。鉄条網の向こうにはゆったりとした町の風景が広がる。囚人にとっては別天地だ。ここを出たければ鉄条網に飛び込めばよい。高圧電流ですぐ死ぬ。いくつもの死体が有刺鉄線にぶら下がり、地面にも転がっている。監視塔の兵隊が暇つぶしに囚人を撃ち殺すこともある。

絞首台もある。第一ブロックには人目につかない銃殺場もある。

かと思うと、病院もある。しかし危険なところだ。注射で

殺されるリスクがある。外科では意味のない手術がおこなわれる。手足の切断、しかも実験的に。去勢もされる。リンでやけどの実験をされた囚人もいる。おまけに、カポーが囚人を使って外科手術の練習をする。巨大化学薬品会社が自社の毒物サンプルを送ってくることもある。あるいは、会社が囚人を一束いくらで買って人体実験をする。

収容所のお偉がたには特権がある。カポーは個室を持ち、食料をため込む。夜になると気に入りの若い女性を部屋に連れ込む。収容所のすぐ近くには所長の別荘があり、夫人が一家団欒を盛りあげる。お客を招待したりされたりもする。もつといいことに、カポーには売春宿まである。売春婦はよいものを食べているが、やはり最後には殺される。

一九四二年にヒムラーの視察があった。ユダヤ人を絶滅しろ、しかも生産的に。「ユダヤ人問題の最終的解決」作戦の開始である。絶滅工場が建設される。その工事は囚人が担う。囚人はヨーロッパ中から貨物列車で運んでくる。選別は直ちにおこなわれる。働けるか、働けないか。左の列は強制労働、右の列は殺される。

人の手で殺しては時間がかかる。チクロンガスを使い、扉を閉め、小窓から中を観察する。シャワーは見せかけ。ガ

スが投入される。天井のコンクリートが苦悶の爪で削られている。折り重なった裸の死体の山。焼却炉だけでは死体を処理しきれない。屋外に薪を積み、そこでも焼く。一日数千の死体が処理される。生焼けの死体が残る。新式の焼却炉が造られ、効率を上げる。

殺す前に身につけていたものは全て没収。眼鏡、服、靴……。切られた女性の髪の毛で納屋は溢れんばかりだ。これで布を織る。焼け残った骨は肥料になる。

首なし死体が並んでいる。いくつもの切られた首が平たい容器に積み上げられている。体からは石鹼を作る。皮膚も剥がされ、それに卑猥な絵を描いたり……

一九四五年、収容所が増設された。一か所十万の町となり、どこも満員だ。大企業が尽きることのない労働力に興味を示し、自社工場専用の収容所を持つにいたる。シュタイル、クルップ、ハインケル、H.F.ファルベン、シーメンス、ヘルマン・ゲーリンク等の会社がここで労働力を調達する。

しかしナチス・ドイツは敗れ、連合軍が収容所を開放する。焼却炉に石炭はなく、囚人にパンはない。収容所内の道という道に死者が溢れ、チフスも蔓延する。死体はガリガリに痩せている。ほとんどが餓死者だろう。英軍がブルドーザーで

死体をまとめて穴に落とし込む。その数は数えきれない。親衛隊も死体を運ばされる。痩せた裸の女性の死体を背負って歩く。彼女は眼をむいたままだ。切断された頭を両手に一個ずつ持って運んでいる隊員もいる。解放された囚人はわけが分からず、虚ろな目でその光景を眺めている。社会への再復帰は可能なのだろうか。

裁判。

「私に責任はない」とカポーは言う。「私に責任はない」と将校も言う。では、この痩せさらばえた死体の山を築いた責任は誰にあるのか。

戦争は小休止。だが、片目を開けて様子を窺っている。収容所は見捨てられ、跡地には雑草が茂っている。しかし、ここは恐怖で一杯だ。焼却炉は使用不能で、ナチの陰謀は過去のものだというのに……。

九百万の死者がこの風景に憑りついている。

どこかで、悪運の強いカポーや、復職した将校や、密告者が我々を窺っている。収容所という老いた化け物はこの瓦礫の下で死んで眠っている、あのペストのような害毒から今や解放されたかと思いたい。あれはいつか、そしてある国での出来事で、全て終わったことなのだと信じたい。

だが、果てることのないあの叫び声は、今も聴こえているのだ。どこかで、また同じことが繰り返されている。

夜と霧

この映画の原題は『Nuit et Brouillard』、ニュー・エ・ブルイヤール』。「夜と霧」という意味で、ドイツ語の「Nacht und Nebel」、ナハト・ウント・ネーベル」の仏訳である。熟語の「Bei Nacht und Nebel」は、「夜と霧に紛れて」「夜陰に乗じて」といった意味である。

一九四一年一月七日、ヒトラーは「夜と霧」命令を発する。これは、ナチス・ドイツに抵抗する活動家らを密かに拉致し、強制収容所に送れという指示であった。

ヒトラーのワグナー好きはよく知られているが、「夜と霧」という言葉はそのワグナーに由来する。四日間にわたって演奏される「ニーベルンクの指輪」の序夜は「ラインの黄金」で、第三場「地底ニーベルハイム」において、小人族のアルベリヒが隠れ頭巾を身につけ、「Nacht und Nebel, niemand gleich.」「夜と霧、たちまち誰もいなくなる」と唱えて姿を隠す。ヒトラーは抵抗勢力抹消の作戦命令に、このセリフを引用したのだ。

日本では、いつの間にか「夜と霧」という言葉がユダヤ人虐殺の代名詞のようになってしまったが、もともとは、ナチスに抵抗する政治犯拉致を指したものであり、対象は非ユダヤ人活動家であった。

ケロールは対独レジスタンスの一員で、午前四時に「夜と霧」作戦で捕縛され、オーストリアのリンツ近くにあったグーゼン・マウトハウゼン収容所に送られた。そこで彼はカトリックのジャック神父と出会い、兄弟以上に親しくなる。同神父はパリ近郊アヴォンの寄宿中学校の校長で、ユダヤ人の子供たちをかくまったかどで収容所に入れられていた。神父は解放直後に衰弱のため亡くなるが、その彼にケロールは「葬送の歌」を捧げる。

『死刑台のエレベーター』（一九五八）を撮ったルイ・マルは、ジャック神父の寄宿中学校出身で、かくまわれたユダヤ人少年と仲がよかった。この少年は、身元がゲシュタポに割り出され、アウシュヴィッツに送られて一四歳で殺される。マルはカトリック寄宿中学校を舞台にした『さよなら子供たち』（一九八七）を世に出すが、これは殺された少年やジャック神父との交流を描いた自伝的作品で、主人公ジュリアンはマルの化身である。この映画はヴェネツィア映画祭金獅子

賞とセザール賞を受賞する。

ところで、みずす書房からフランクル著の「夜と霧」という著作が刊行されている。私はこれを五〇年近く前に読んだが、内容があまりに衝撃的だったので、今も大切にとってある。レネの映画のDVDを見つけたとき、この著作を映画化したものかと思ったが、実はそうではなかった。こちらはアウシュヴィッツ強制収容所を奇跡的に生き延びた体験記で、原題は「強制収容所における一心理学者の体験」である。フランクルはユダヤ人であったがゆえにアウシュヴィッツに入れられたのであって、「夜と霧」命令で拉致移送された囚人ではない。欧米諸国では、「夜と霧」はまずヒトラーの拉致命令を意味し、またレネのドキュメンタリー映画を指す。だから、フランクルの著作が日本でのみ「夜と霧」の名を冠しているのは誤解を招くので不適切である。なお、彼の両親と妻は強制収容所で殺されたが、生き延びた彼は戦後ウィーン大学医学部神経科教授を務め、一九九七年に亡くなった。フロイトの系列に属する有能かつ高名な精神科医であった。

誤解を招く字幕、文学としてのナレーション

この映画を観始めて数分で、私は違和感を覚えた。右腕を

挙げたヒトラーの前をドイツ国防軍が行進する。ナチスの台頭を示す映像である。彼のすぐ前、一段下には親衛隊全国指導者ヒムラーが立っている。この部分はレニー・リーフェンシュタールのナチス宣伝映画『意志の勝利』（独、一九三五年）からの借用である。

字幕には「一九三三年、機械的な行進」とある。

ところが、ナレーションは次のように言っている。「一九三三年、（ナチスの）メカニズムが始動する。異論を唱える者もなく、内輪もめもない国家でなければならぬ」。行進が機械的だとはひとつも言っていない。

私は注意深くナレーションを聴くことにした。コンピュータを使ってDVDから音声を抽出し、これをMP3に変換してUSBに入れ、機会あるごとに聴いた。理解が深まるにつれて、このナレーションが単なる映像の解説ではなく、優れた散文詩であることが分かってきた。つまり、この映画は映像と文章から成り立っているのだ。したがって、文章を理解しないと、半分しか映画を観たことにならない。

次に私がやったことは、インターネットでのナレーションの検索である。『夜と霧』のテキスト ジャン・ケロールとフランス語で打ち込むと、二とおり現れた。どちらも映画

の音声から起こしたもので、綴りや文法の間違いと脱落がある。そこで私は、これら二つのテキストの補正と音声との照合をおこなった。

字幕は相当いい加減なものだが、とんでもない誤訳もある。例えば、八分を少し過ぎたころ、画面に「NN」の二文字が映り、「青いしまの服 服により『夜』と『霧』に分類される」という字幕が現れる。これでは、囚人が夜組と霧組に分けられたと理解するしかない。しかし、これは「Nacht und Nebel」の頭文字であり、そのあとのナレーションを聴くと、「『夜と霧』と分類される囚人は赤い三角印を付けた政治犯である」と言っている。

字幕にケチをつけることは私の本意ではないので、この辺でやめておくが、このナレーションには日本語訳が存在する。一九七〇年に学藝書林から出版された「全集・現代文学の発見5 抵抗から解放へ」に、大島辰雄訳編で『夜と霧』のナレーションがアラン・レネの作品として掲載されている。実際に文章を書いたジャン・ケロールの名は、製作スタッフの中に解説者として小さく出ているのみである。若干の誤訳はあるが、ケロールの言いたかったことはほぼ訳出されている。ただし、ほとんど逐語訳なので、原文の美しさは偲ぶべくも

ない。

関連の映画とアウシュヴィッツ収容所長ヘスの手記

ナチス・ドイツは強制収容所を数多く造ったが、ガス室を備えたものは、特に絶滅収容所と呼ばれる。ヒトラーはユダヤ人を劣等とし、法律を制定して絶滅することを正当化した。ヒムラーは、この方針を無慈悲かつ徹底的に遂行するように命令する。これが「ユダヤ人問題の最終的解決」と呼ばれる作戦である。だからこそ親衛隊員は収容所で彼らを殺すことを当然と考え、全く罪の意識を持たなかったのだ。なお、この作戦には別の側面があった。それは、ヨーロッパでユダヤ人が築き上げた莫大な資産の没収である。これによってナチス・ドイツは巨億の富を手にしたが、それでもまだ満足せず、殺したユダヤ人の口をこじ開け、金冠をかぶった歯まで抜き取ったのである。

『ドキュメント アドルフ・ヒトラー 狂気の野望』というタイトルで市販されている一〇枚組のDVDがある。その中の『ナチス絶滅収容所』および『ナチス強制収容所』の二枚は一九四五年の強制収容所解放時に撮られた米軍による記録映像である。あまりに無残で、正視に耐えないほどであ

るが、アラン・レネはこれらの映像も利用している。

終戦後直ちにニュルンベルク裁判がおこなわれ、ナチスの戦犯の多くが絞首刑に処せられた。我々は今、この時の記録を映画で観ることが出来る。ソ連のロマン・カルメン監督による『ニュルンベルク裁判 人民の裁き』（一九四五）と米高等弁務官によるドキュメント『ニュルンベルク裁判』（同）である。両者には戦犯たちの処刑直後の姿が生々しく残されている。なおスタンリー・クレイマー監督の同名のアメリカ映画（一九六一）は記録映画ではなく、ナチス・ドイツの法曹人裁判の劇映画である。

アラン・レネの『夜と霧』はその後の映画に影響を与えずにはおかなかった。強制移送や強制収容所の場面が出てくる作品には、ジョセフ・ロージの『パリの灯は遠く』（伊・仏、一九七六）、クロード・ルルーシュの『愛と悲しみのボレロ』（仏、一九八一）、ステイヴン・スピルバーグの『シンドラーのリスト』（米、一九九四）、ロベルト・ベニーニの『ライフ・イズ・ビューティフル』（伊、一九九七）、ロマン・ポランスキーの『戦場のピアニスト』（英、二〇〇三）などがある。とりわけ『シンドラーのリスト』と『戦場のピアニスト』は今も深く私の心に突き刺さっている。

昨年八月に、みすず書房から、オランダ人ファン・デル・クナープ編「映画『夜と霧』とホロコースト」が出版された。

この本はこの映画の製作にかかわる周辺事情や、フランス、ドイツ、イスラエル、イギリス、オランダ、アメリカでの受けとめかたが詳しく記されている。ただ、翻訳はこなれたものとはいえない。また、ケロールのナレーションからの引用が一部誤訳されているのが残念である。

関連の書物で忘れてはならないのは、ルドルフ・フェルデイナント・ヘスの「アウシュヴィッツ収容所」（一九七二、サイマル出版会）であろう。

著者ヘスは同収容所の所長を務め、ユダヤ人、ロシア人、ジプシー等を二五〇万人ともいわれるほど大量に殺害・処理した。彼は、一九四七年、自分のいたアウシュヴィッツ収容所において絞首刑に処せられた。本書は彼の告白遺録である。これによれば、青酸ガス・チクロンBをガス室に投入すると、三分の一は即死し、遅くとも二〇分後には全員死亡したという。泣き叫んだり逃げようとする親子を無理やり押さえつけて銃殺するより、はるかに心理的負担が軽いとのことだ。また焼却炉には一度に三体を入れ、二〇分で処理できると言っている。一九四二年には、ガス殺人と焼却の最大数を記録し、

二四時間で九千人以上を処理したという。人間を殺して焼却することが、あたかも不要物品を処理するがごとく、淡々と語られている。

大量殺戮に関する命令系統の絶対性も明らかにされている。ヒムラーの命令に従わないという選択肢はありえなかった。ヘスは言う、「ユダヤ人大量虐殺が必要であったか否か、それについて、私はいかなる判断も許されなかった」「もし総統が『ユダヤ人問題の最終的解決』を命じたとあれば一人の古いナチ党員にとつて、いかなる疑いもありえない」「総統は命じ、われらは従う」「親衛隊の訓練機関で、国家のため、同時に彼らの神でもある天皇のため、自らを犠牲とする日本人が、輝かしい手本とたたえられたのも、いわれのないわけではない」。日本はナチス・ドイツのかがみとされていたのであるか。

なお「ユダヤ人問題の最終的解決」との表現は、戦後逃亡中のアルゼンチンから諜報特務庁モサドによつてイスラエルに連行され、絞首刑を執行されたアイヒマンによるとされる。彼はヘスの直属の上司であった

本誌編集長林久登氏は、ポーランド滞在記「愛すべきかかあ天下の国　ポーランド」の「アウシュヴィッツ収容所訪問の

くだりで、「中に入ると、髪の毛、眼鏡、靴、義足、入歯といった犠牲者の遺品が部屋単位で無造作に山積みされている」と記している。ヘスの遺録によると、大戦末期にソ連軍・連合軍の進攻があまりに迅速であったため、収容所を跡形なく処分してから撤収するという基本方針を貫徹できなかった、としている。これがアウシュヴィッツ収容所で、建物と犠牲者の遺品がともに残った所以であろう。ちなみに、トレブリンカ収容所は破壊後整地され、住宅が建てられ、植林までされたので、その跡地が長い間見つからなかったとのことである。

最後に度肝を抜かれる映画を一本紹介しておこう。クロード・ランズマンの『シヨア』（仏、一九八五）である。アラン・レネに遅れること三〇年。ナチスのホロコーストの当事者に直接当たって世に出したドキュメンタリーである。制作に一年を要したと記されている。収容所を生き延びたユダヤ人、目撃した人たち、元親衛隊員等が登場する。上映時間五六七分と、超の付くほどの長編であり、かつ凄まじい内容なので、観るにはある程度の覚悟が必要である。ランズマン自身、対独レジスタンスの闘士であった。